

ロドリゴ帰国の旅へ

無事、駿府に戻ると、ロドリゴは再び大歓迎を受ける。それから、数ヶ月も駿府で過ごす。家康に再見。豊後臼杵への道中で、手厚い接待を受けたことを感謝。そしてサン・フランシスコ号と同時航海で臼杵に漂着した老朽船、サンタ・アナ号の様子を見て、この傷んだ船では、帰りの太平洋横断は無理と報告。家康は、従前通り、わが船を提供するから安心しろとロドリゴに伝える。

さらに、家康とロドリゴは、日本とスペイン（エスパニーニャ）、ヌエバ・エスパニーニャとの通商を開く、具体策を検討。テーマは、ヌエバ・エスパニーニャからの鉱山技師派遣、その精錬報酬、港の開港、信教の自由、オランダ人の日本からの追放等々である。

オランダ人の追放は、彼等との通商取り決めがあるので、今は、できない。しかし、それ以外の議題は、大いに発展させようではないか、と家康は応える。家康はロドリゴとい

う人物を信頼している。ロドリゴもまた、助けられた家康に今や畏敬の念さえ持つている。こうしてロドリゴはスペイン国王、ドン・フェリーペ三世に国交を開く趣意の上申書を送ることになる。

結果、家康は、新たに国交を結ばんと、その友好の証に、まずは国王に使者を派遣し、献上品を贈ることを決める。誰が良いかと家康。そしてロドリゴは、この使者の役目、彼と親しいパードレ・ムニョス（神父、日本で同行）を選ぶ。その後、ムニョスは、一六一〇年十一月、マドリッドに着き、家康と秀忠の書簡と贈り物を国王に届けることになる。スペイン国王は直ちに会議を開き、毎年一隻の商船をアカプルコから浦賀に渡航させること等を決め、国書と贈り物を使者達に持たせる。

家康は、正式にウイリアム・アダムスが建造した船をロドリゴに与え、さらにヌエバ・エスパニーヤ（メキシコ）帰国に際する、必

要準備金として四千ドウカド（現価約三千万円と推定）を提供。「以上のような厚遇を大御所は与えて下さり、江戸城の將軍に再び会うよう命じられました」とロドリゴは記す。

そしてロドリゴは家康の指示通り、江戸に向かう。將軍秀忠と再見。秀忠は、必需品を初め準備万端、調える。こうして大多喜城下に残っていた遭難船員は、各自の意志に従い、大半が長崎からヌエバ・エスパニーヤ（フィリピン）ルソン島に帰ることになり、メキシコ希望の船員は、ロドリゴとともに、アカプルコに帰ることになる。

帰国の日がやって来た。ロドリゴは浦賀に行く。船を造った、ウイリアム・アダムスと再見。大多喜以来の友好を暖める。そしてついに船は、一六一〇年八月一日（慶長十五年六月十三日）浦賀を出港した。

家康から贈られた百二十トンの外洋帆船をロドリゴ達は幸運に恵まれるよう、サン・ブエナベントウーラ号と名付ける。浦賀を出港し

た船は、次第に日本本土から離れていく。甲板に立つロドリゴは、次第に遠ざかる、富士を見続けている。ロドリゴの胸中には、これまでの出来事が走馬燈のように駆け巡る。まるで夢のようである。あの途方に暮れ、死を覚悟した御宿での遭難。冷え切った身体を温めてくれ、食べ物を恵んでくれた、村民のありがたさを思い出し、思わず、涙する。それほどばかりか、大多喜の殿の厚遇を得、家康、秀忠の計り知れない扱いに接する。江戸、駿河、京都、臼杵への旅を通して、遭難という不幸な出来事から、はからずも、始めて接するところになった日本の文化、そしてこの国の人々の温かい持てなし。歓迎。ついには、国交の端緒を開く、大御所、家康との交流。全てが走馬燈のように胸に去来する。「帰国の太平洋船旅は、過去に経験したことのない幸せに満ちあふれた航海であつた」と記す。

船には家康の意向を伝えるに本国スペインに赴く、パードレ・ムニョスも乗っている（メ

キシコ経由でスペインへ)。しかし、それだけではない。なんと、京都の商人、田中勝助、朱屋隆成、山田助左右衛門等、日本人二十一人も乗船していたのである。必然的に彼等は始めて太平洋を横断した日本人となった。

ロドリゴはヌエバ・エスパリーニャ（メキシコ）に帰ると、日本見聞録の執筆に取りかかる。微に入り、細に入り、膨大な記録。

ヌエバ・エスパリーニャの返礼

ロドリゴ帰国翌年の、一六一一年、スペイン副王、ルイス・デ・ベラスコは、セバスチャン・ビスカイノを特使として日本に派遣する。三月下旬にアカプルコを出港し、六月十日浦賀に入港する。この時、ロドリゴと一緒にメキシコに渡った日本の商人達もラシヤ、ビロード、葡萄酒などを買い入れて、帰国している。ビスカイノは、早速、家康、秀忠に謁見。ロドリゴ達に提供された船の代金や借入金を返済。加えて、遭難船員厚遇への謝意を改めて伝えるべく、西洋式置時計を家康

に贈答。この西洋式置時計こそが日本に伝来した、初めての機械仕掛け、ぜんまい式の西洋時計となる。時計は、その後、家康の最初の墓所、久能山東照宮に収められ、現在も記念館に保管されている。

西洋式置時計

二〇一四年五月、産経ニュースで次のような記事が発表された。「一六一一年スペイン国王フェリーペ三世から徳川家康に贈られ、静岡市久能山東照宮で保管されてきた西洋時計のレプリカ製作が始まった。この時計は国の重要文化財。部品の摩耗を防ぐため、これまで作動させずに保存されてきたが、レプリカで当時の機能や動きを再現し、一年後に一般公開される予定。実物を分解して詳細な設計図を作り、来日している、ロンドンの古時計専門職人、ヨハン・テン・ヒューブ氏が英国に持ち帰り、完成させる。この時計の高さは二十一センチメートル、幅十センチメートル。真鍮製。実物は、一五八一年スペイン、

マドリードで作られ、当時の国王が愛用し、一六〇九年御宿沖で難破したスペイン船乗組員を手厚く保護して出国させた、お礼に寄贈されたもの。世界で二十数台現存する当時の西洋時計は修理などで部品が取り換えられたケースがほとんどだが、東照宮の時計は当時の部品が残っている上、摩耗も少ないという。

ビスカイノは、貿易開始の準備と遭難防止のための海岸測量の許可を願い出る。家康、秀忠は、それを許す。彼は仙台に赴き、陸奥の海岸から房総までの測量図を作成し、家康、秀忠に贈呈。役目を終えたビスカイノは、一六一二年九月に浦賀から帰国の途につくが、暴風に遭遇。結局、十一月、浦賀に引き返すことになる。

ビスカイノの船は嵐のため破損しており、太平洋横断には使えそうにない。そこで、やむなく新しい船を造る資金援助を家康に嘆願する。しかし、家康にしてみれば、またか

という思いがあつただろう。彼の目はロドリゴほど気に入っていないということもある。それにここ一二年の間に、政情は大きく変わっている。特に、スペインには侵略の意志があり、金銀の探検が本当の狙い、とオランダ人が吹き込んだことも影響している。スペイン国王からは何も音沙汰ないし、家康は迷う。そこで手を差し伸べたのが、伊達政宗である。キリスト教に関心を持つ彼は、自前で造った新造船「まつまる」の提供を家康に申し出る。家康は喜び、この案を呑む。結局、ビスカイノは、この船でメキシコに帰国する。彼等はこの船をサン・ファン・パウテイスタ号と名付け、一六一四年一月に出港した。しかし、この年は、大きな転換期を迎えていた。それというのも国内では、豊臣を一掃すべく、大阪城攻め、すなわち、大阪冬の陣が始まる。すでに実権は掌握しているのだが、家康は未来に向けての、完全な平和体制を築くべく、非情とも言える挙に出たのである。

支倉常長

そんな日本の国内事情は知らず、ビスカイノの船は航海を続けた。そして、歴史上、興味深いことに、この船には、伊達政宗配下の支倉常長達が乗っていた。支倉には、スペイン国王フェリーペ三世及びローマ法王パウロ五世に会うこと。すなわち、交易を開始すること、そのためにはキリスト教伝道師の派遣を許す旨を伝える役目が託されていた。世に言う支倉使節団は、日本ですでに布教活動していたルイス・ソテロ神父を初め、武士六十名、商人百三十名で構成されていた。彼等は、ヌエバ・エスパニーニャ（メキシコ）經由で本国スペインを訪問する計画である。この伊達政宗による、支倉使節団派遣の背景には、恐らく家康との打ち合わせがあると思われる。とにもかくにも、ロドリゴの御宿遭難は、日本史の上で、新たな頁を開く出来事へと展開していく。

メキシコに着いた一行は、大歓迎を受ける。

副王自らが警護部隊を派遣。メキシコ市まで警護させる。そこで大規模な歓迎の宴が催され、主立った高位聖職者、官民代表者がこぞつて彼等を接待。このようなことは、スペイン人の遭難救助と厚遇に対するヌエバ・エスパニーニャの感謝の証である。

そして、アカプルコ到着から四ヶ月後、支倉以下約二十名がベラクルスからスペインへ向けて出港する。ちなみに、使節団以外の者は、初の海外体験後の翌年、同じ船（サン・ファン・バウティスタ号）で日本に帰国している。一方、支倉等は、一六一四年十月、スペインに到着。無事、フェリーペ三世に謁見する。皇帝は温かく迎える。その後、両国の交易に賛同する法王パウロ五世に会うため、ローマへ赴く。無事、法王との会見に成功した後、彼等は、再びマドリッドに帰った。ところが、この僅か数ヶ月間にスペインの接待状況は一変し、最早、冷遇に近いものとなっていた。このスペイン側の変貌は、「日本では、

キリスト教信徒の迫害が始まっている」との知らせを受けていたためである。あせった支倉は、その後も、二年半にわたり、粘り強く交渉を重ねる。しかし、結局は、断念。ヌエバ・エスパリーニャ（メキシコ）に戻る。そして一六一八年に、マニラ向けのスペイン船に乗り、帰国することになる。

スペイン本国の対応

ヌエバ・エスパリーニアに戻ってからのロドリゴは、日本との交易が遅々として進まないことにいらだつ。彼が日本に行った一六〇九年から数年の間に事態は大きく変貌していた。家康は大阪の役に明け暮れ、一方、スペイン、フィリッピー三世が日本に派遣した一行（宣教師含む）は、経由地、ヌエバ・エスパリーニャ（メキシコ）で滞留。メキシコ総督府は、国王に再考を促す始末。結局、交易案件は除外。布教中心の国書に書き改められ、国王使節団は、一六一五年浦賀に着く。江戸に家康はいない。一行は大坂夏の陣からの帰還を待

つ。そして、駿府で彼等と会うことになる。家康は、国書と贈り物を受け取ったものの、大いに不満であった。そこには交易のことが一切触れられていなかったためである。銀の精錬技師派遣のことも立ち消え。これについては家康の方にもある裏事情があった。ロドリゴと会見の一六一〇年、家康は金銀採掘で極めて優秀な官僚、大久保長安に命じ、石見銀山を開拓させ、成功。だが、一六一三年、大久保長安の死去にともない、横領罪の嫌疑が持ち上がり、家康は長安を断罪する（長安事件）。こうしたこともあった、翌一六一六年に家康は病に倒れる。そして、異国の侵略を恐れた幕府は、次第にキリシタン迫害を強め、ついに三代家光の時、完全な鎖国令が発せられる（一六三八年）。もし家康が健在であつたならば、この時、異国との交流関係をどのような処理していただであらうか。

両国の信頼関係は続く

これで両国の関係は完全に消滅。永遠に終

わったかのように見えた。しかし、日本とヌエバ・エスパニーヤとの信頼関係は、完全に途絶えることはなかった。一七三八年には、ヌエバ・エスパニーヤで、スペイン語で書かれた日本語文典が発行され、一八四一年には、日本の船が嵐に遭遇して漂流。エスパニーアの密輸船に拾われ、数名がメキシコ滞在后、日本に帰還。それぞれの体験記が著され、鎖国下にあつて、海外事情を知りたい日本の知識人にとり、貴重な情報源となった。一八一〇年九月十六日は、メキシコの独立記念日。この日、ヌエバ・エスパニーヤは、スペインから独立すべく十年戦争を起こす。そして一八七四年には、メキシコは「金星の太陽面通過」観測の最適地として日本を選び、大統領自らが天文学者の日本派遣を決定。横浜と野毛山を観測基地とする。明治政府もあらゆる便宜を供与した。観測は大成功を収め、翌年、メキシコは、世界の先進国に先駆けて調査報告を発表し、大反響を呼んだ。しかし

何といつても、家康とロドリゴが築いた信頼関係の復活を示す出来事が一八八八年（明治二十一年）に両国で取り交わされた「墨日修好通商航海条約」である。これは、英国、フランス、ドイツ等との条約と異なり、日本にとつて初めての完全な平等条約であったからである。それは、お互いに歴史の感謝を秘めて友情と信頼に支えられた取り決めであった。改めていうまでもなく、家康とロドリゴの親交に端を發した両国の友好関係は、ここに大きく結実する。ロドリゴの御宿遭難と家康の大きな対処は、四百年後の世界に生きる。ロドリゴ以来、それまで皆無であつた太平洋横断の行き来が始まる。彼は宗教的布教に偏らず、両国の自由貿易の必要性を最初に主張した、スペイン人だったのである。

【参考資料】

「ロンロドリゴの日本見聞録」安藤操書 谷口書店
「条約から条約へ。墨日関係史ノート」メキシコ大使館。翻訳官
アーニバル上原。

「ドン・ロドリゴの幸運」小倉明 汐文社